

かけだしの頃

今だから話せるゲンバの失敗

初めて大きな仕事を任されたときの経験は、誰にとっても特別な思い出でしょう。私にとってそれは、同時に大きな失敗を思い起こさせる、苦い思い出でもあります。

入社して四年目、私がまだ二十七歳の頃、出張先に突然、工事部長と課長が現れるということがありました。「なぜ二人が、こんなところにいるのだろうか？」と不思議に思っていると、二人は私に「次の現場で現場代理人を任せる」と告げました。わざわざそれを告げるために、遠い出張先まで来てくれたのです。それが私にとって、現場代理人を担当する初めての工事でした。

その工事は高速道路の壁高欄地覆部を斜めに^はり取り取りモルタルにて整形後、高欄前面には折り曲げ鋼板を、背面にも鋼板を張り付け補強するというものでした。初めての現場代理人で、さらに、上司が貴重な時間を割いてまで直接伝えに来てくれたとい

う事実に、私の心は気迫に満ちあふれていました。

工事を始めて3週間経った頃、モルタル修正を終え、鋼板設置作業に入ったとき、ある失敗に気付きました。鋼板はアンカーと樹脂で固定するのですが、アンカーを打ち込むための孔（穴）あけ作業で、道路のコンクリート内の鉄筋に当たってしまったのです。本来なら、きちんと現場で鉄筋位置の下調べをした上で穴の位置を決め、それを基に鋼板を製作すべきところ、急ぐあまり、図面と現場の違いの可能性を考慮せず、図面だけを基に鋼板を発注したことが原因でした。

パニックになった私は、様々な留意事項にも気付かず、ただ中間検査に間に合わせることにしか考えられませんでした。合わない鋼板は再発注し、そこで生じた遅れを取り戻すべく、鋼板の継ぎ目の溶接を急がせ、

ショーボンド建設株式会社
首都圏北陸支社
安全管理部長

石田 進吾

昭和53年（1978年）ショーボンド建設株式会社に入社。以来、工事部長、工事検査部長を歴任し、現在に至る。



結果、溶接部近辺に凹凸が発生してしまいました。塗装の出来もひどく、一応、中間検査には間に合ったものの、検査官にはそれらを指摘され、ひどく叱責されました。その際は、非常に落ち込みました。

そこからは、なりふり構わず周囲の人々に相談し、指摘された箇所を修正する方法をなんとか考えて、巻き返しを図りました。上司や現場の職人の経験と知恵を借りてすべてを修正し、最後の竣工検査では、「よくここまでやった」と検査官に褒められるほどの仕事が出来ました。奇しくも中間検査と竣工検査の検査官が同じ人で、その人に認めてもらえたような感慨があり、泣きたくなるほど嬉しくなったのを覚えています。この出来事は私に、段取りの大切さを、身に染みるほど教えてくれました。若い方にも、是非、それを覚えておいていただきたいと思っています。